

# 誰も取り残されない防災の地域づくり ～障がい者の防災ワークショップ～

大木幸子<sup>1)</sup>、瀧澤勤<sup>2)</sup>、南雲潤<sup>2)</sup>、桧垣知子<sup>2)</sup>、小松実弥<sup>1)</sup>

1)杏林大学保健学部看護学科看護学専攻地域看護学研究室

2)みたか街かど自立センター

## 1. 背景

2011年東日本大震災、2016年熊本地震、2018年西日本豪雨災害、2019年台風・豪雨災害と、短期間に多様な災害が続いている。2019年は台風やその後の豪雨災害では、事前の情報収集、避難行動の重要性が注目された。しかし、障がいがある人達やその家族の避難行動の困難さや情報が届かないなどの課題が指摘されている。東日本大震災では、死亡者の半数を高齢者が占め、障がい者の死亡率は全住民の2倍と報告されている。そのため、2013年には災害対策基本法が改正され、高齢者や障がい者など避難に支援が必要な人(避難行動要支援者)の避難行動支援の取り組みをも自治体に求めている。さらに2021年には、避難行動要支援者の個別避難計画の作成を自治体の努力義務とされた。そのため、三鷹市においても2022年度より計画作成に取り組みが始まったところである。しかし、市による個別避難計画を作成の支援は、人工呼吸器装着者など重症者が優先されており、全ての障がい者を支援するには、かなりの時間を要するものと考えられる。

一方で、2021年に行われたNHKによる障がい者調査では、87%の人が災害への不安を感じており、ハザードマップ確認経験なし39.7%、避難のタイミングを決めていない41.3%、避難しない16.9%、最寄りの避難所へ行く48.8%、福祉避難所を知らない62.2%、地域の避難訓練への参加経験なし55.5%、地域の避難訓練での障がいへの配慮なし62.3%、個別計画の未作成72.4%という結果である。このように災害時の脆弱層である障がい者の防災対策は「自助」「共助」「公助」いずれも十分に講じられていない現状である。

## 2. 活動目的

本活動は、三鷹市の自立支援協議会当事者部会等で活動している市内在住の障がい者と市内障がい者支援事業所の支援者、市民を対象とした防災に関する実践ワークショップをととして、障がい特性に応じて求められる防災対策や避難行動に関する工夫や課題を検討し、障がい者の「自助」「共助」の促進することを目的とした。

## 3. 活動内容・結果

### 3-1. 活動概要

- ① 企画検討会議:障がいのある人が実践する実践型のワークショップの企画について、当事者とともに企画会議で検討した。
- ② ワークショップ:障がいをもつ人たち、支援者、市民が参加して、非常持ち出し袋の準備や避難所への避難行動の検討など防災のための実践型ワークショップ開催した。
- ③ 振り返り会議:体験をととしての気づきや工夫点、課題を話し合った。
- ④ 自治体・市民への発信:当事者の体験を基づく気づきを中心に、障がいを持つ人が日頃から取り組むべき防災行動や地域の人々に知ってほしいこと、公助として期待することを検討した。

## 4. 考察

### 4-1. 当事者にとっての体験型ワークの意義

当事者の体験とその体験の共有を行うことで、自分の体験の振り返りに加え、他の体験者の準備内容を知ることで、自分の準備について新しい工夫を考える機会となった。また他の参加者も、「自分なら・・・」とイメージすることができていた。これらの点は、多くの防災情報が健常者を前提としていることが多い中、障がいを持つ人が自分ごととして考えるきっかけとして作用しており、体験型であり、実際の準備物品を広げることでの可視化されることでの成果と考えられる。

### 4-2. 周囲への波及効果

本活動で作成したパネルは、支援者からの要望もあり、防災イベントや障がい福祉イベントで展示等を行った。展示では、市民や市議会議

## 3. 活動内容・結果(左下からのつづき)

### 3-2. 活動内容

- ① ワークショップ「検証！非常持ち出し袋」
  - ・ 障がいをもつ当事者2名、支援者1名、市民1名が、自分にとって必要な「非常持ち出し袋」を準備し、ワークショップ会場まで持参。
  - ・ 袋内の荷物内容披露し、各物品を必要とした意図、準備過程の迷いや工夫を伝えてもらい、参加者全員で意見交換を行った。参加者数:13名  
障がいを持つ当事者・家族6名、支援者2名、自治体職員4名、市民1名
- ② ワークショップおよび振り返り会議で出た当事者の意見
  - ・ 「準備に3日くらいかかりました。いろいろな助言もいただいたが、自分で持って行ける量を調整しました。家族の手助けが難しい場合は、一人で白杖を使って避難しなくてはならないので、荷物はできるだけ、軽くする必要があると思いました。」
  - ・ 「一人で避難所にもって行く準備ができるか心配。持ち物に名前を書いておくよと思った。リュックに入れる順番(よく使うものは、上の方に入れるなど)も考えないといけないと思いました。携帯トイレ、アルミシート、笛などは持っているけれども使い方がわからない。準備するだけでなく、使ってみると、災害時にも対応がしやすくなりそうだなと思いました。」
- ③ ワークショップ内容の発信
  - ・ ワークショップとその後の振り返り会議での意見交換の内容を基に6枚のパネルを作成し、以下の機会での展示等を行った。
  - ・ 防災マルシェでのブース出展(9月10日)
  - ・ 三鷹市防災訓練での展示(10月2日)
  - ・ 障がい者週間での展示(12月)等



員等から多くの関心が寄せられた。パネルは、準備された全ての物品の写真、当事者の意図や気づき等の声を含む内容とした。このように当事者視点で体験内容を可視化することが、市民等とともに「誰も取り残されない防災」を考えるツールとなり得ることが示唆された。

また、こうした成果をうけ、地元自治体から、今後も各種イベントにて本パネルを使用したい旨の申し出を受け、自治体に貸し出し中である。当事者、支援者、市民で行うこうした取り組みは、障がいのある当事者が防災への準備性の向上とともに、周囲へのSOSの「共助」の力を引き出し、その上で「公助」の在り方を検討する機会となり、誰も取り残されない地域づくりに貢献するものと考えられる。